

# 六甲山森林整備戦略

## 六甲山森林整備戦略　次の百年を目指して

六甲山で植林がはじめられてから110年を迎えました。都市の中心にある六甲山は、古くから人々と関わりを持ちながら変遷をとげてきました。

現在では、樹木も大きく成長しましたが、過去に同じ時期に植林されたため、樹種や樹齢の多様性が乏しいまま世代交代ができていない所があります。また、十分な手入れがされずに荒廃が進む所も見られ、土砂災害の発生、景観の悪化、病虫害の発生などが懸念されています。

いま、六甲山と人との関わりを結び直し、新たな都市山・里山として再生することが求められています。このため神戸市では、神戸の貴重な財産である六甲山を、美しく健全な状態で次世代にも引き継いでいくための長期的なプランとして、「六甲山森林整備戦略」を策定しました。

### 森林整備戦略の目的

「都市山」六甲山と人の暮らしとの新たな関わりづくり  
ー六甲山の「恵み」を「育てる」・「活かす」・「楽しむ」仕組みづくりー

- 市民の暮らしと六甲山の新しい関係を再構築する森林整備の方向性を確立します。
- 森林の持続可能な管理システムをつくりだすため、先導的な森林整備ゾーン（＝戦略的ゾーン）を設定します。
- 六甲山の新しい価値を創造する技術開発や仕組みづくりに取り組みます。

## 六甲山ってどんな山？

### 歴史

六甲山は、古くから人々の日々の暮らしと密接に関わる生業・往來の場でした。都に近いことから、薪炭材・木材・石材採取など過剰利用が進み、江戸時代には既にはげ山化していました。

このため土砂災害が多発したことから、明治期以降は砂防堰堤等の施設整備や、荒廃した森への植林など、災害防止のための事業が行なわれてきました。

明治28年には、英国の実業家A・H・グルームが六甲山上に別荘を建設し、山上開発の先鞭を付けました。別荘に居住した外国人は、登山道やゴルフ場などを整備すると共に、きのこ狩やアイススケート、クロスカントリーなどを楽しみ、六甲山を近代レクリエーションの場としました。

大正～昭和初期には、ドライブウェイや六甲ケーブル等が整備され、観光・レクリエーションの場として発展しました。今日も、六甲山は多くの来訪者を迎え賑わっています。



▲塩ヶ原（現在の修ヶ原）植林工事完成時（明治36年）  
（神戸市資料）



▲昭和初期のハイキングのようす  
（出典：「六甲山災害史」兵庫県治山林道協会）

### 六甲山の森林の将来像

多様な植物や生きものが育まれ、多くの恵みをもたらし、美しく、活力あふれ、街とつながる安定した森林  
『六甲山』



### 森林整備戦略の基本的な考え方

市民・企業・行政等の協働による  
六甲山の森林を支える仕組みづくり

- 多様な主体との協働による森林の育成、活用
- 戦略的ゾーニングによる森林整備の推進
- 森の恵みに対する新しい価値の創造
- 新たな仕組みや技術の導入による持続可能な森づくり
- 市民や企業等が支える仕組みづくり

### 自然

六甲山は雨が多く、地形が急峻で、かつ風化の著しい花崗岩によってほぼ全山が覆われています。このため、大雨・長雨などの際に土石流や斜面崩壊が発生しやすく、また土中に水分・養分を保ちにくいことから、荒廃すると植生の回復が難しいといわれています。

現在の六甲山は、一区域に同林齢、同種の樹木が成長し、土壌の緊縛力の低下が懸念されています。また、間伐などの森林管理が十分でないため、過密で林齢の高い森林が多く、生物多様性や景観の観点からも課題となっています。

六甲山の森林の変化イメージ（再度山のモニタリング調査結果より）



1974

2009

1974年から2009年までの35年間で、

- ・樹木の種類が減少
- ・高木が増加
- ・下層の樹木種数が減少
- ・常緑広葉樹の占める割合が増加

森林の階層構造が単純化